

## Artist 1



# Kei Tsujimoto 辻本 佳

滞在:2022年9月6日~9月20日  
住まい:宮ノ内お試し滞在住宅  
カウンターパート:柏井ファーム



私は、「空間と場所の認知」について関心を持っており、ダンス作品や写真作品の制作・発表を行なっている。アンリ・ルフェーブル、エドワード・W・ソジャ、イーファー・トッアンらの著書から空間論についての着想を得て、空間(知覚される、思考される、生きられる、地理的空間)に焦点を当てている。長く日高に住んでいる柏井家の話や、地域おこし協力隊の方々、沿革にいる斎藤さんの話を伺うことで、複数の視点で話を伺えたことは非常に有意義であった。併せて、2週間の滞在の中で、日高村村史を読み、実際に生活することで、明治以降の日本と日高村の変遷について思いを巡らせることができた。滞在期間中、特に夜は時間があつたため、もし日高村に移住するならどう生活を送りたいかについて考えてみた。私は数年前に結婚して、パートナーの仕事が都市部でしかできないため、移住することは難しいだろうと予想された。しかし、私個人で移住を考える場合には、就農支援を受けて、農家として生きていくこともあり得るかもしれないし、和紙も仕事として面白いのではないかと考えた。滞在期間中に、「いの・アートミーティング」や、高知市にある高知県立県民文化ホールでダンス公演を見ることができたことや、蛸蔵のようなインディペンデントスペースがあることも魅力的に感じた。地域おこし協力隊の方々も、澁刺として、移住先として魅力的な場所なのだろうと感じた。以前より、40歳を目前にして生活や働き方を変えたいと考えていたので、京都に戻つてからは、園芸・農業関係の求人を探しており、自身の制作と生活のあり方を見直している。もし、今後日高村に滞在することが可能であれば、国道33号線と日下川の歴史を中心に、作品作りを行いたいと思っている。短期間でしたが、受入事業者となってくださった柏井さん、滞在のお世話をしてくださった斎藤さん、村内を案内してくださった地域おこし協力隊の村上さん、日高村の方々にも非常に感謝しています。本レジデンスでの、初日と最終日は台風と重なり、ある意味日高村、台風県高知を感じる機会になりました。期間中は、ゆったりと日高村を味わえ、充実した2週間でした。

Multi-disciplinary artist (ダンサー・振付家・現代美術)

5歳から20歳まで茶道を学ぶ。'09-'13カーン国立振付センターCompany FATTOUMI LAMOULEUX" Just to dance..."に参加。Monochrome Circus、あごさとし、やなぎみわ、康本雅子、井田亜彩美、などのコラボレーションを継続的にこなしている。故郷である紀州熊野でフィールドワークを行い、自然物、音、写真、身体感覚を収集し、自らの身体を媒介として扱い舞台上で再構築することで作品を制作している。「Field Pray」と題して、『#1 どうすれば美しい運動が生まれるか』『#2 擬態と遊行』『#3 泥炭地』を発表。国際芸術祭などへも参加している。2021年2月に新作『洞』をTHEATER E9 KYOTOにて上演、同名写真作品シリーズを発表し、好評を博す。2021年4月に舞台芸術、現代美術の普及発展に貢献することを目的とし、『つじもどけい事務所』を設立、代表を務める。8月には、WITHコロナにおける作品のあり方を探る滞制作作品辻本佳『渠』シリーズ(主催:つじもどけい事務所)を、京都府八木市、長野県茅野市、京都府京都市にて展示、公演を行う。

## Artist 2



# Ayaka Ono Akira Nakazawa Spacenotblank 小野 彩加 中澤 陽 スペースノットブランク

滞在:2022年10月10日~10月25日  
住まい:宮ノ谷お試し滞在住宅  
カウンターパート:壬生農園

2022年10月。日高村にて14日間のアーティスト・イン・レジデンスを行ないました。私たちは二人組の舞台作家で、普段は舞台芸術作品を制作しています。過去にはアルバイトで接客業や販売などを行っていたこともありますが、現在は作品制作のみを生業としているため、他業種の仕事に触れる機会はとても新鮮なものでした。しかも生業農家というまったく未知の世界に、行く前まではいったい何が待ち受けているのか、少しのこわい気持ちと、たくさんわくわくした気持ちがありました。いざ行ってみれば、「日本はどこに行っても日本だな」と思ったり、「自然がたくさんあって心地がいいな」と思ったり。「こんな田舎に来て嫌じゃない?」と何度か訊ねられましたが、そもそも私たちの仕事に固定観念を拡張するようなことであることもあり、特に「田舎」か否かを気にすることはありませんでした。どこに居ようがインターネットさえあればなんでもできる現代だからこそ、かもしれません。「どこに居てもやることは変わらない」といつも考えています。しかしそれは「場所性」というものを否定しているようにも聞こえてしまふし、どうしても「ここでしかできないことは何か」を自然と考えようとしてしまいます。そのどちらも共存した状態、つまり創造的な制作と、普遍的な生活を新しい場所で両立させるのがアーティスト・イン・レジデンスの魅力だと思っています。今回日高村には、私たちの思考、表現、活動などのあらゆる「必然性」を省みる機会にしようという意識で行きました。そしてまさしく現在の私たちの状態を発見し、理解しようとするころに至ったと感じています。私たちが何をやりたいのか、何をやり続けて行きたいのか、何を表現したいのか、すべきなのか、完全な答えにはまだ辿り着いていませんが、その取捨選択をするための新しい選択肢をたくさんいただけたと思っています。それは何か、具体的に説明するにはまだ言葉が足りません。ただ、実感として未来の行く先を考えるきっかけのひびこになったことは、間違いありません。今後、城崎やフランスでのアーティスト・イン・レジデンスを控えています。2023年から2024年にかけては、さまざまな場所に出向いて、さまざまな場所で上演をする機会もいただいています。日高村での体験、経験は、非常に豊かなものでした。結果として私たちは私たちが目的と答えを導き出し、日高村という環境に於ける私たちの「必然性」に今後の私たちにどつの一縷の希望を垣間見たように思います。「次に何をやるのか」を考えるために、必要な時間だったと、強く感じています。また高知にも、日高村にも訪れたいと思います。私たちができることを探しながら、辿り着くべくして辿り着いたひびこの場所として、これからも大切に日高村のことを思い出し、また新しい場所に日高村で生まれた萌芽を運んでいければと思います。



小野彩加と中澤陽が舞台芸術の制作を行なうコレクティブとして2012年に設立。舞台芸術の既成概念に捉われず、独自の新しい仕組みを研究開発しながら舞台芸術の在り方と価値を探究している。固有の環境や関係により生じるコミュニケーションを制作の根源とし、作品ごとに異なるアーティストとのコラボレーションを積極的に行なっている。2018年、高松市「高松アーティスト・イン・レジデンス」選出。2019年、穂の国どよはし芸術劇場PLAT「豊橋アーティスト・イン・レジデンス/ダンス・レジデンス」選出。2020年、ロムシアター京都×京都芸術センターU35創造支援プログラム「KIPPU」選出。2021年、金沢21世紀美術館芸術交流共催事業「アムド21」選出。2022年、KYOTO EXPERIMENT 2022「Shows」招聘。